年間第 4 主日

2016 年 1 月 31 日

歓迎されない預言者　（ルカ　4：21～4：30）

只今、朗読しました福音の冒頭によると、イエスに対してナザレの人々はとても好意的でした。ところが急に敵意を抱き「崖からイエスを突き落とそうとしました」と。（ルカ 4：23）

「群衆の感情が変わりやすい」ということは、良く知られているのですが、それにしてもその変化は、あまりにも早すぎるのでは、と不自然に感じるかたが居られるでしょう。

それはその通りです。実は、ルカが書いたことは、一日のうちに起った出来事ではありません。ルカは「一日の出来事」という文学的な形を通してイエスの一生を要約し、イエスの運命を描いています。確かに初めに歓迎されたイエスは、最後には排除されてしまいました。しかしそのことに驚いてはならないということを暗示するためか、イエスは二人の預言者、エリヤとエリシャの例を挙げ挑発的な色に染まった「ことわざ」を引用して「預言者は、自分の故郷では歓迎されない」（ルカ 4：24）と、おっしゃいました。

皆さんもご存知のように、エリヤとエリシャは紀元前 9 世紀の北王国イスラエルの有名な預言者です。二人が活躍した頃、イスラエルの民はエジプトから先祖たちを解放した唯一の神から離れ約束の地を与えた神を無視し、思うままにカナンの神々、偶像を礼拝してしまいました。経済的には国は栄えていたようですが信仰の面において、イスラエル〈神から選ばれた民〉は、どん底の状態に陥っていました。エリヤとエリシャは、たゆまず信仰の道を再び歩み、神に立ち帰るようにと、ことばと業をもってイスラエルの民に呼びかけ続けました。しかしその努力と労力は水の泡となったとまでは言えないにしても、殆ど実を結ぶことなく、預言者の命さえ幾度となく危ういものとなりました。

とうとうイスラエルの民は、預言者のことばを通して語っておられた神の声に、耳を傾けることができず、預言者の業を通して神の働きを見出すことができませんでした。ところがレバノンの貧しい寡はエリヤを神の人として（列下 19：8）迎えました。またエリシャの言葉に従うことによって（列下 5：9）重い皮膚病から清められたのはシリアのナアマンでした。

イスラエルの民は自分の神を信じることを断わりましたが、異邦人はイスラエルの民の神を信じました。この歴史的な事実を思い起こすよう勧めたため、ナザレの人々をはじめユダヤ人は不愉快な思いをしたことが分からない訳ではありませんが、感情に身を任せた彼等は大きな過ちを犯してしまいました。〈自分たちは、エリヤとエリシャの時代のイスラエルの民、つまり信仰を捨てたものと同様にイエスに見られ、扱われたと解釈して、イエスから侮辱されたと勘違いしてしまいました。〉言うまでもありませんがイエスは意地悪くユダヤ人を苛立たせるために、この古い出来事を思い起こさせたのではありません。

―イエスは次のことを人々に教えようとしました。エリヤとエリシャの時代にイスラエル

の人々が神のことばに耳を傾けず、そのことばを理解しようとしなかったのと同じように、あなたたちナザレの人々やユダヤ人も気をつけなければ、自分は神から遣わされた者であることを見逃してしまうかもしれません～確かに、わたしはナザレの者でありヨセフの子（ルカ 4 ：22）ですが、わたしの内には神が働いており、わたしは昔から神に約束されたメシア、キリスト、救い主です。表面的なことに捉われず真実を探し求め、わたしが誰であるかを悟るようにしなさい。ナザレの人々よ、ユダヤ人たちよ、エリヤとエリシャの時代のイスラエルの民の失敗を繰り返さないように気をつけなさい、と。すなわち、古い話を思い起こさせることによってイエスは、ナザレの人々やユダヤ人を侮辱しようとしたのではなく、悲劇的な食い違いが生じないためにイエスは必死の努力をして下さったということです。ほぼ二千年も経った今も、その話を通してイエスは紀元前 9 世紀のイスラエルの民や、わたしの時代のユダヤ人の失敗を繰り返さないようにと、わたしたちに警告していると思います。―でも、わたしたちは主イエス・キリストを信じているから、その心配は無用ですよと、簡単に安心してしまうのではないでしょうか。

〔預言者は、自分の故郷では歓迎されない〕（ルカ 4：24）という、自分の考えや自分の主張していることが受け入れられず、人の反発と反対にあい、人の理解を得られないときにイエスのことばを当てはめようとする人はいるようです。ところが〈あなたの考えと行動は、イエスの福音に相応しくない〉と言われて、それを口にしている人を「預言者」として見出すことのできる人は、どの位いるのでしょうか。〈あなたの生き方は、あなたが信じると宣言していることを反映していません。言うことと、することは全然違うんじゃないか〉と言われた時、その指摘を神からの指摘として素直に受け入れることを、どこまで自分はできるでしょうか？

ところが自分の考え方、在り方、信じ方に疑問を投げ掛けている人は「預言者」であるのかも知れません。せめて、その可能性を頭から排除しないように心掛けることは大切なことだと思います。

―もちろん人の注意は、イエスの福音に基づいた注意であれば、の話しです。―

「預言者は、自分の故郷では歓迎されない」という、言葉を通してイエスは自分に注意を与えている人のうちに、神から遣わされた「預言者」の姿を見出すことが、時には必要であることをも教えていると思います。

　このように考えてみると分かるように、人を通して語る神の声に耳を傾けることは昔のイスラエルの人々や、イエスの時代のユダヤ人と同じように、わたしたちにとっても、それ程、簡単なことではありません。

わたしたちも求められている素直さを、自分のうちに養うことができるために、この感謝の祭儀の間に共に祈りたいと思います。

ベリオン・ルイ神父